

鴨 東 通 信

おうとうしん

秋

四季報 No.75
2009.9

▶シリーズ古都の近代 〈第1回〉

戦争と古都

高木博志

▶てーたいむ

最後の文人・水木要太郎と水木コレクション

高橋一樹

▶史料探訪③

龍馬を斬った刀

木村幸比古

▶エッセイ

たいまつの火を受け継ぐ

中田雅博

『茶の医薬史—中国と日本』刊行に寄せて

岩間眞知子

▶リレー連載 世界のなかの日本研究

蘭亭が語るもの

亀田和子

▶源氏物語千年紀・古典再生に向けて〈最終回〉

読書の楽しみの中の古典文学

片桐洋一



◎新刊案内◎

文人世界の光芒と古都奈良／日本の心と源氏物語／東アジアのなかの日本／実国・師光全歌注釈／原三溪翁伝／緒方洪庵

思文閣出版

文人世界の光芒と古都奈良

大和の生き字引・水木要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編
(国立歴史民俗博物館教授)
(京都大学准教授)
(国立歴史民俗博物館准教授)

明治新政府によって「国家創生の地」と位置づけられ、にわかに注目を浴びた近代奈良。そこには当代一流の歴史学者・芸術家たちが集まった。そしてその中心にはいつも水木要太郎がいた。

【10月下旬刊行予定】

※水木要太郎（一八六五―一九三八）は、明治後半半・昭和初期、奈良女子高等師範学校教授、奈良帝室博物館学芸委員などを歴任。一方で、大和地方の歴史・考古・地誌の研究活動を進め、大和古寺の瓦や経典、中世・近世文書、典籍や写本のほか、近世の刊本・刷り物や絵地図・暦本・著名文化人の書簡など、多様なコレクションを収集した。

※水木の交遊は古文書学の黒板勝美、考古学者の浜田耕作、建築史家の天沼俊一、さらに岡倉天心・安田靉彦・小倉遊亀らの芸術家にまで及ぶ。

※個人により形成された多様な史料の「かたまり」である水木コレクションを主な分析の素材とし、日本史学・考古学・建築史学・国文学・美術史学・地理学・社会言語学等にわたる学際的な共同研究の成果。



水木要太郎（個人蔵）

※同時代の文人・収集家と水木を比較するとともに、近世・近代移行期における「コレクション・文化財・地誌編纂」などをめぐる学知の、断絶・継承や近代アカデミズムとの関係を論じる。

▼A5判／五〇〇頁／定価八、一九〇〇円／ISBN978-4-7842-1481-5

カラー口絵4頁／総論（久留島浩・高木博志・高橋一樹）

第Ⅰ部 近代奈良と水木要太郎

水木要太郎と大和郷土史研究

蒐集家崎山卯左衛門の郷土研究

保井芳太郎のコレクション形成とその背景

近代日本と拓本収集

近代国語の構築と奈良県方言

水木要太郎時代の奈良女子高等師範学校の修学旅行と学知

水木要太郎と集古会

「江戸史蹟」の誕生

天理参考館所蔵山本不二男コレクションの形成とその特色

第Ⅲ部 水木コレクション

水木要太郎に見る一明治青年の知識形成過程

水木要太郎と「名勝案内」

「水木の大福帳」にみる前近代文書の近代

遊翁結社の活動と『現存歌選』の出版

「類題現存歌選」をめぐって

大和古物と水木コレクション



宝物番付（個人蔵）



平城宮の瓦
 (国立歴史民俗博物館所蔵)

- (吉井敏幸)
- (黒岩康博)
- (岡島永昌)
- (内田好昭)
- (中井精一)
- (高木博志)
- (久留島浩)
- (岩淵令治)
- (乾 誠二)
- (岩橋清美)
- (丸山 宏)
- (高橋一樹)
- (田中康二)
- (鈴木健二)
- (岡本彰夫)

戦争と古都

高木博志



戒壇堂広目天立像(国宝・東大寺蔵・入江泰吉撮影・入江泰吉記念奈良市写真美術館写真提供)

大正十四年(一九二五)生まれの亡父のアルバムには、教え子や友人とともに訪れた浄瑠璃寺・法隆寺など、一九五〇年代の写真が貼ってあった。父はほとんど戦争のことを話さなかったが、被災した大空襲以前の、大阪の町や暮らしへの思い入れは強かったように思う。子供のときまだ間近でみることできた、広目天がある東大寺戒壇院へは、よく連れられていかれた。

奈良や京都の今日につながる、かつて天皇が住んでいた旧都として郷愁をともしなうイメージは、戦後につくられた部分が大きいと思う。その起点の一つは、東京や大阪など大都市への空襲による古い町並みや人々の生活の破壊にあり、そこから古都への郷愁が生み出されたのだらう。入江泰吉も大阪を空襲で焼け出され、敗戦直後に、三月堂へ疎開先から搬入される仏像を目撃しアメリカが接収す

るのではと思った。すぐに水門町自宅そばの戒壇院・四天王を最初に、奈良の風物を撮りだした。東大寺観音院の上司海雲のもとには志賀直哉・杉本健吉らがつどい、「天平の会」がはじまった。「神武創業」は戦後改革で否定されるが、天平文化などの古代は日本文化の始まりとして、戦後の政治でも利用された。文化財を保護するためにウォーナーが奈良や京都を空襲から守ったという神話が成立し、正倉院御物は一九四六年秋から一般公開された。「文化国家」が発見し、「文化財」という語も戦後アメリカのデモクラシーとともに語られた。

京都大学人文科学研究所では、近代古都の共同研究をおこなっているが、そこでは文化と政治がかかわる視点を大切にしたいと思っている。

(たかぎ・ひろし)

京都大学人文科学研究所准教授

●「大和の水木か、水木の大和か」

水木要太郎（一八六五～一九三八）は、明治の終わりに昭和のはじめにかけて大和郡山に居を構え、大和（奈良）地方の歴史・地誌の研究や教育活動に携わるかたわら、漢詩・和歌・俳句・書画など、多芸・多趣味で知られていました。親交のあった東京帝国大学の黒板勝美（歴史学）には「大和の水木か、水木の大和か」と評され、また他方で「正倉院の案内人」と称されるほどに、近代奈良においては一目置かれる存在でした。

彼は伊予国（現在の愛媛県）で生まれ、松山中学に進みました。ちなみに松山中学では二つほど後輩に正岡子規がいました。のち、東京高等師範学校に進学、卒業後に三重県で小学校の教員になります。そして、当時奈良にいた知人の招きに応じて明治三〇年代に奈良にやってきます。

奈良に移ってきた水木は、はじめ郡山中学の教員になります。そしておもに大正以降（一九一二～）徐々に活躍が知られるようになり、最終的には奈良女子高等師範学校（現在の奈良女子大学）の教授や、奈良帝室博物館（現在の奈

ていーたいむ

最後の文人・水木要太郎と 水木コレクション

高橋 一樹

（国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学准教授）

良国立博物館）の学芸委員を務めました。

●水木コレクション

奈良での活躍と比例する形で、水木はさまざまな資料を集めはじめます。収集された資料の特徴は一言でいうと、奈良に関するものならなんでも集める、ということでした。

古文書・古瓦といった、現在の学問分野からみて直接の研究対象となりうる資料だけではなく、書籍・教科書・印刷物はもちろん、建築部材・書画・絵葉書、はてはお弁当の包み紙……、とにかくありとあらゆるものが収集の対象です。私たちがイメージするいわゆる「コレクター」には、切手やレコードなど特定のジャンルがありますが、水木の場合はそういった集め方をしていません。

このように収集された資料群、さらに水木が付けていた日記、そして明治の三〇年代からは日記が「大福帳」と呼ばれるフィールドノートに代わるのですがそれが三百数十冊、それらを含めた総体を私たちは「水木コレクション」として把握しています。総数は、大部分を所蔵する国立歴史民俗博物館だけで約六〇〇〇〇点にも

なるので、他機関の所蔵品も含めれば七〇〇点以上にはなるはずです。

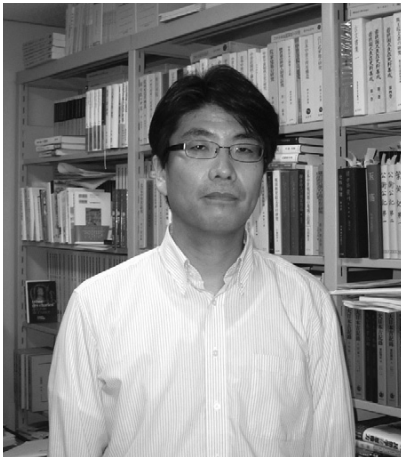
個々の資料に目を向ければ、その価値は無量大といえるでしょう。近現代の生活史における一級資料となるような日常的な品々。また水木は「正倉院の案内人」といわれたほどですから、当時の正倉院をめぐる情報もいろいろ含まれています。すでに一定の評価を受けている古文書・古瓦など、現在の学問分野に照らして、それぞれの基本資料となるものも大量に含まれています。

いわゆる「大和古物」の世界では、今なお水木が一度でも所持したものは非常に価値が高いといわれています。彼のモノを見抜く力が卓越していたことは間違いありません。

●コレクションを総体としてとらえる

しかし、私は総体としてのコレクションの価値にこそ注目すべきだと思います。つまり、一個人あるいは一つの家が、これだけ膨大な資料を集めたという事実が持つ、近代という時代の特徴・制約・規定性という問題です。

本論文集のもとになった共同研究では、こうした視点から近代史の研究者だけでなく、資料の種類に即して、古代・中世・近世・近代の日本史学、美術史学・文学・考



古学・社会言語学等といったさまざまな研究者が一緒になって、ひとつの資料群を題材に議論しました。近代史研究の新しい研究方法を提言できたのではないかと思います。こうした研究を可能にしたということが、水木コレクションの持つもっとも重要な学術的価値ではないでしょうか。

他方、これまで水木コレクションの利用は、ほぼ歴史学と考古学に限られていました。しかし今回、たとえば美術史の方面に水木コレクションの重要性を提示できたと思います。

日本画家の小倉遊亀は水木の教え子ですし、歴史画の大家である安田靉彦と小倉遊亀を引き合わせたのも水木です。その安田靉彦は奈良に留学するさいに、岡倉天心から水木を紹介され、大いに世話になっています。安田靉彦との間では多くの手紙や葉書が交わされたようで、それも資料として残っています。

●文人世界の光芒

いろいろな物を収集し、それを同好の仲間と見せ合い、批評しあう、そういった文人趣味的なグループが、近世から近代のはじめには都市部を中心に広く存在していました。代表的な人物としては近世の蜀山人（大田南畝、一七四九―一八二三）があげられるでしょうか。水木はこの文人の系

譜に位置づく、最後の世代なのだと思います。

水木は幕末の生まれですから、近世以来の文人的価値観を当然のものとして受け入れることができたし、それに対する憧れもあったはずで、彼のフィールドノートである「大福帳」は蜀山人の「判取帳」をまねたものです。

ただ、水木の場合はそれだけにどまらなかつた。つまり、古いものを集めればよいという趣味的な世界と、近代的な学知の両側面にふれた人でした。この過渡的性格は、近代の出発ともいえるでしょうが、それだけでは割り切れない、近世から引き続く文人の系譜の、最後のきらめきといえるのではないのでしょうか。

●近代奈良というフィールド

水木とほかの収集家・文人を比べた場合、水木を特徴づけているのは近代奈良というフィールドだと思います。かつて都城がおかれたとはいえ、中世以来の奈良は江戸や大坂・京都とは比べるべくもない、一地方都市にすぎませんでした。それが、近代になると、「国家創生の地」として政治的に位置づけられていきました。

その奈良にはある時期、「国家」の誕生を跡づけるべく、近代の学知を身につけ、後に中央の官学アカデミズムの担い手となる研究者たちが、県の技師や学校の教員などとして集中しました。

また当時、史蹟・勝地を調査する組織が全国的に作られていきますが、そこでも奈良は中心的な役割を担わされていました。水

木も奈良県史蹟勝地調査委員としてこれにかかわっています。

さらに水木が奈良にやってきたころは、東京で近代歴史学が体系立てられていく時期でもありました。彼は奈良に集まった一線級の研究者たちを通して身につけた、当時最新の学知を、大和における資料収集や研究活動に役立てていきました。一方で彼が収集した資料は、中央の官学アカデミズムにおける歴史学・考古学・古文書学などの体系化に直接的に寄与していきました。こうした、持ちつ持たれつの関係が成り立っていたと思います。

その後、多くの人材が官学アカデミズムの担い手として中央へ戻っていく中で、水木は奈良に残りました。水木の功績として注目しなければならぬのは、奈良の「郷土史」研究を次の世代へと引きつぐ役割を担ったという点だと思います。水木は、自ら収集した資料を用いて専門的な研究を残しはしなかったのですが、一方で次の世代への橋渡し役を果たしたといえるでしょう。

実際、現代の研究史につながってくるレベルの研究が大和から出てくるのは、水木の次の世代からになります。

(二〇〇九年七月二十九日 於・国立歴史民俗博物館)

史料

探訪

38

龍馬を斬った刀

靈山歴史館学芸課長

木村幸比古

来年のNHK大河ドラマは「龍馬伝」と決まり、舞台となる長崎、高知ですでに活発に取り組んでいる。関連事業のNHK主催の展覧会も江戸東京博物館、京都文化博物館、高知歴史民俗資料館、長崎歴史文化博物館の四会場を巡回することが決まり、私も企画委員として微力ながらかわらせてもらっている。

龍馬は京都で薩摩と長州の同盟の仲介役をつとめ、下宿先の近江屋で朋友中岡慎太郎とともに幕府見廻組の一団に暗殺された。近年、暗殺の黒幕は誰かなどのテレビや書籍で話題はつきない。

靈山歴史館では来年、通年で大龍馬展を開催するが、その展示品の中で目玉になるのが「龍馬を斬った刀」である。この刀は、一尺三寸九分（脇差 銘は「越後守包貞」とあるが偽名である。刀身には龍馬と斬り込んだときの受け傷が残り惨劇のすごさを物語っている。刀の持ち主は幕府見廻組肝煎の桂早之助だった。代々桂家では龍馬を斬った刀と伝えられていた。

平成六年七月、桂家から関係資料を一括して靈山歴史館へ寄贈された。

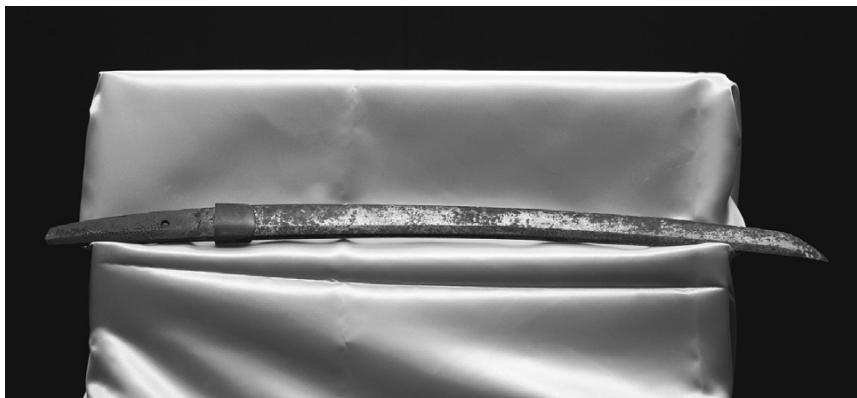
この刀を大正九年頃に調査した維新史料編纂官の川田瑞穂は高

知県出身であった。川田はのち漢学者として早稲田大学教授となり、終戦の詔勅の創案者として知られる。

川田はこの刀の発見を回想して「初より室内の闘争を予期して長刀を携えざる小太刀の名人のみを二階に闖入せしめたのである。予は桂早之助の娘婿桂利器の宅にて右に使用せし刀を見せて貰ひたり、二尺に足らぬ脇差程度のものではあった」（『土佐史談』六九号、昭和十三年）と記している。

川田は、箱館戦争の降伏人である元見廻組今井信郎が龍馬暗殺に加わった状況を話した自供書にもとづき、二階に上った桂早之助、佐々木只三郎、渡辺吉太郎、高橋安次郎らの子孫を尋ね調査したところ、暗殺に使用の刀を発見したという。

今井の自供とは、「龍馬暗殺は見廻組組頭（与頭）の佐々木只三郎の指揮で実行に及んだが、あくまで自分は見張り役であった」と弁明、龍馬暗殺への直接関与を強く否定した。新政府陸軍省は身柄を刑部省へ送り、この申し立ての審理をした結果、明治三年（一八七〇）九月二〇日、禁錮刑を申し渡し、身柄を静岡藩に引き渡した。



龍馬を斬った刀(靈山歴史館蔵)

明治新政府は慶応四年（一八六八）正月、二条城前に太政官布告の駒札を立て、暗殺の禁止を布告した。その中で維新前の暗殺は不問としたため、今井を龍馬暗殺では裁くことはできず反乱軍としてのみの判決であった。今井の裁判記録は一切公表されず、刑部省（司法省）に保管されていた。裁判記録は、司法省記録「断刑伺書」（明治二～八年）の中の明治三年に所収されて関係者以外は閲覧できなかった。

今井について西本願寺侍臣の西村兼文

は「一五日夜、土州藩坂本立馬（龍馬）、中岡慎太郎道正、京師の旅寓において、幕府の臣今井某等のために殺さる」（『文明史略』・明治九年）と著しているが、龍馬暗殺が一般に公表されていない時期にどのように史料を入手したか興味をおぼえる。

桂早之助を刺客とみていたのは、龍馬の暗殺現場に一早く駆けつけた土佐陸援隊の田中光顕で「最近の調査では、小太刀の名人早川桂之助（桂早之助）、渡辺（吉）太郎の所為であるといわれている」（『維新風雲回顧録』・昭和三年）と語っている。

桂早之助は天保一二年（一八四一）四月、京都所司代組同心の桂清助利重、母志ウの長男として京都所司代組屋敷に生まれた。姓は菅原、いみなは利義、早之助は通称。一一歳で所司代組同心並河一三二跡に仕える。剣術は西岡是心流、一七歳ですでに同流兵法九ヶ条目録並びに兵法目録の各一卷を授けられ、とくに小太刀の名手だった。京都文武場の剣術世話心得にも命ぜられた腕前であった。

新選組隊士の結城無二三は、「ことに桂は大わざで、ひとたび太刀を振りかざすと、スカリスカリと心地よく斬れる達人の域に達していた」と回想し、桂の腕前は相当なものと言語っていた。

体格も龍馬よりひと回り大きく剣客として恵まれていた。桂の実力を裏付ける例として、元治元年（一八六四）の將軍家茂上洛の際に催された上覧剣術大会でも、江戸議武所の剣客と総当り戦でことごとく打ち破り白銀五枚を將軍から賜っている。

新選組が武名を轟かせた池田屋事件に、桂は所司代から出動命

令を受け新選組と不逞浪士多数を捕縛し、幕府から褒賞金五両を賜った。このような実績が目にとまり、慶応三年（一八六七）二月三日、京都見廻組に推挙せられ、刺客のひとりに加えられたという。

慶応三年（一八六七）十一月十五日、見廻組の桂らは龍馬の下宿近江屋を急襲し、龍馬、中岡慎太郎、下僕山田藤吉を暗殺したという。その後、桂ら刺客の多くは鳥羽伏見の戦いで戦死した。

毎年、十一月一日に龍馬祭が行われているが、明治三十九年（一九〇六）両雄四〇年祭式次第によれば襲われた日をもつて祭典を行うことになった。本来の死亡日は龍馬と藤吉は翌一六日、慎太郎一七日となっている。霊山墓碑にも龍馬没日が一六日と刻まれ、京都府社寺課から明治政府への霊山祭神の報告書「招魂社並び碑明細帳」にも、一六日の死亡とされている。暗殺の黒幕については、いまもって謎のままである。

— MEMO —

霊山歴史館

京都市東山区清閑寺霊山町一丁目

京都市バス「東山安井」「清水寺」徒歩5分

阪急「四条河原町」・京阪「祇園四条」徒歩20分

Tel. 075153113773

霊山歴史館は、全国唯一の幕末・明治維新の専門歴史博物館として昭和四五年（一九七〇）に開館。江戸中期以降、とりわけ天保期後の諸藩志士をはじめ朝廷、公卿、諸侯、藩主、文人、画家など重要人物の遺墨、詩文、遺品、書状や各種資料・文献などの収集、調査、研究、公開展示を行っている。収集資料は五〇〇点を超える。

公開展示は約一〇〇点を選んで常設展を行い、時期によっては全国各地の博物館や個人所蔵家の協力を得て特別展を開催している。

秋の常設展

九月一日（火）～一〇月一八日（日）

秋の特別展

「龍馬たちの挑戦」

一〇月二日（水）～十一月三日（祝・月）

たいまつの火を受け継ぐ

中 田 雅 博

大阪・北浜に、緒方洪庵が経営した適塾がある。現代の高層ビルが立ち並ぶなかで、そこだけタイムスリップしたように、幕末の面影を漂わせている。

鎖国から開国という激動期にあつて、洪庵はここで多くの若者たちを教育した。門下生のなかから福沢諭吉、橋本左内、大村益次郎、大島圭介、長与専斎、佐野常民などが巣立ち、明治という新たな時代を切り開いた。

作家の司馬遼太郎は、「洪庵のたいまつ」という作品で、こう述べている。

洪庵は、自分の恩師たちから引きついだたいまつ火を、よりいっそう大きくした人であつた。かれの偉大さは、自分の火を、弟子たちの一人一人に移し続けたことである。弟子たちのたいまつ火は、後にそれぞれの分野であかあかとかがやいた。やがてはその火の群れが、日本の近代を照らす大きな明かりになったのである。

司馬遼太郎は、筆者にとって産経新聞の大先輩でもあるので、以下司馬さんと呼ぶ。

大阪大学名誉教授の梅溪昇先生に初めて洪庵についての話をうかがったのは、平成一三年、筆者がワシントン支局から大阪の編集局に戻ったころであつた。

そのとき、やはり司馬さんの話が出て、梅溪先生は「たいまつ火を絶やしてはいけませんね」と、おだやかな調子でいわれた。適塾は、昭和一七年に大阪大学が管理することになり、その伝統を守り育てていくため、二七年に適塾記念会が発足した。梅溪先生は、日本近代史の専門家であるとともに洪庵の研究者であり、長年にわたつて適塾記念会を支えてきた一人である。

だが、昭和以降の適塾の歴史は決して平坦ではない。三九年に適塾の建物は重要文化財に指定されたが、やがて建物の老朽化が進み、五一年から四年がかりで解体修理工事が行われた。現在の形で保存されるまで、多くの人々が協力を惜しまなかった。司馬さんもその一人であつた。昭和四八年のことである。

「適塾記念会の活動が低調になり、司馬さんに理事就任をお願いしました。司馬さんは快く引き受けてくださった」

司馬さんはその後、小学校五年生の国語の教科書向けに「洪庵

のたいまつ」を書いたのである。

筆者はそれから、梅溪先生に長く教えを請うことになる。先生から何度か、洪庵と適塾について新聞に書いてみませんか、と誘いがあった。「洪庵が実際にどんな人物で、適塾がどういうところだったのか、真実の姿に迫ることができれば、現代にも大きな意味があると思います。司馬さんのように文化部の記者になれば、書けるんですが」と答えた。

そのころは、政治国際室というところでデスクワークに忙殺されていた。文化部に行くことなど思いも寄らなかったが、どういうめぐり合わせか、平成一七年夏に文化部に異動になった。そこで、先生との約束を果たすことになり、洪庵について調べ始めたところ、その秋から翌年春まで、USATODAYに出向を命じられ、再びワシントンに赴任することになった。約束は延び延びになり、産経新聞紙上で「適塾再考」の企画を連載し始めたのは、文化部に戻った翌年の平成一九年一月である。

最初に「教育編」として、幕末という激動期にあった適塾が、どうして明治の世を支えた多くの人材を輩出したのか、その実態を探った。最初は四、五回で終わる予定だったが、読者の反響が大きく、一五回まで延長した。

執筆の内情をいえば、筆者は「梅溪ゼミ」の一学生に戻り、梅溪先生が過去に調べられた史料を逐一当たり直し、その都度、先生の見解を聞かせてもらい、そのうえで自分の考えをまとめていった。

だが、洪庵と適塾については、すでに多くの研究がなされている。新たなページを付け加えるにあたり、筆者なりの原則を貫くことにした。

それは、史料をできる限り原典において精査し、関連の地を自分の足で訪れて、この目で確かめるというジャーナリズムの取材方法をとることであった。そして、歴史的事実と、取材から導き出される推論の部分はつきり分けて書くことである。それによって、何がわかって何がわからないのか、明確になるはずである。

その後、「医学編」として三九回にわたって医師としての洪庵を検証し、最後に「遺産編」として主だった適塾門下生ら一五人をとりあげ、平成二〇年一二月に連載を終えた。このたび、その連載を改訂し、思文閣出版から『緒方洪庵——幕末の医と教え』として出版する。

来年は、洪庵の生誕二〇〇年である。洪庵の「たいまつ」が次世代に受け継がれていくことを切に願い、それに少しでも貢献できれば、と思っている。

(産経新聞記者)

『茶の医薬史—中国と日本』刊行によせて

岩間眞知子

ひとり灯のもとに 文をひろげて 見ぬ世の人を友とする
こそ こよなう慰むわざなれ（『徒然草』十三段）

本は小さいものである。そこに見ぬ世の人との限りなく豊かな出会いがある。本を通して、見ぬ世の人の素晴らしさに、尊敬と憧れを抱いたことが、これまでどれほどあったことか。

『神農本草経』に、私は茶の記事を探していた。『神農本草経』は、存在のわかる最古の薬書である。そこに「神農は七十二毒に中るも茶で解いた」とあると、多くの本に書かれていた。その復元本の端から端まで、何度も探してみた。ところが見つからない。

次に古い写本を探し出した。敦煌出土『本草集注』（神農本草経集注）序録（龍谷大学蔵）を見ていたときである。五三三行目に「茶茗」とあり、思わず飛び上がった。茶茗は、まさしく茶である。茶が『本草集注』序録に記されているなど、これまで日中の茶書でも医薬の研究書でも指摘されていなかったからその発見から、私の研究は始まった。

茶は、唐の勅撰『新修本草』（六五九年）で初めて採録された薬と、医薬史では認識されてきた。ところがそれより約一六〇年も

前の陶弘景撰『本草集注』序録に、茶は嗜眠症の治療薬として記され、それは歴代の薬書にも連綿と書き継がれていた。しかし唐から今日まで千年以上も、見過ごされていたのである。

じつは『本草集注』本文にも、茶は活写されていた。巻七「苦菜」の注で、陶弘景は『神農本草経』の上葉「苦菜」を茶と同定し、その理由と茶について語っていた。ところが唐の『新修本草』は、茶は木類だから菜類の苦菜ではないと陶弘景の意見に反論し、それ以降の薬書はみな『新修本草』を踏襲した。さらに『茶経』や『太平御覧』は、陶弘景の注の一部を『桐君薬録』の文として引用した。そこで陶弘景の茶の記述は、正當に評価されず、陶弘景は学者で実際の茶を知らないと言われた。

しかし古代の医薬書や史料を読むと、唐初まで茶はスープの具となる「菜蔬」に分類され、「茗草」「荈草」とも呼ばれていた。「菜」は、漢代の字書『説文解字』によると「草の食すべきもの」という。つまり茶は「草」であり、「菜」でもあった。それは今日の常識からは理解しがたい。だが『茶経』が列挙する茶を表す五文字を見ると、「檟」を除く「茶・設・茗・荈」はみな草冠である。

つまり陶弘景は『神農本草經』に「苦菜」という名で茶が記されたと考えたため、新たな項目は立てず、「苦菜」の注に茶の様相を詳述したのである。その文章は『茶経』以前の茶を知る上で貴重であるのに、これまで顧みられなかった。私もまた陶弘景の文を何度も読みながら、幾重もの目隠しに妨げられていた。ところがある日、遙かな時空を超えて、陶弘景に出会った。意図が分かったのである。その感動は言葉に出来ないほど大きかった。また最近、森立之という『神農本草經』の最高の研究者が、『新修本草』の誤りを指摘し、『神農本草經』の「苦菜」を茶ともみなした文章を見つけた。やはりと、強力な味方を得た思いがある。

さて平安時代、茶はどれほど日本に広まっていただろう。現存最古の日本の医書『医心方』には、茶についての貴重な記述が見える。巻一「諸薬和名」に、「松羅」は和名「末都乃古介」と万葉仮名で記され、「龍腦香」は「唐」とのみあり、和名が記されない。「茗」には和名「茶」とあり、「茶」は大和言葉の「まつこのけ」などと並ぶ。唐とのみ記される薬物も多い中で、和名を持つのは、茶が日本の生活に浸透していたからではないだろうか。また平安時代（十世紀）からチャを和名と認識していたということ、植物としてはともかく茶の飲用法の渡来が、中国でチャと称し、茶という文字を用いて以降とも推察された。

『医心方』にはまた、茶の古い飲食法を伝える記述もあり、そのほか『喫茶養生記』が養生記といえながら、なぜ茶と桑についてばかり記すのか、蠟茶は日本に存在したかなど、長年いだいてい

た疑問について、医薬書を通してようやく見えてきたことは少なくない。改めて史料を読むことが、いかに重要かを痛感した。そこで茶に関する歴代の医薬書で最善と思われる史料を、翻刻でなく影印で一書に収録すれば、次世代の研究に役立つにちがいないとも考えていた。

こうした研究は、静岡県茶業会議所の月刊誌『茶』に連載し、そのころから出版を勧められた。ところが出版について私は、全く見当がつかなかった。ただ医薬史でも茶史の分野でも定評のある思文閣出版と漠然と考えていた……。すると、思いがけなく故細野正信先生がつかないで下さり、刊行費の助成も三徳庵大日本茶道学会からいただくなど、多くの方に助けていただいた。

刊行後は、雑誌やブログでも紹介され、周囲に薦めてくださる方も多い。茶学の会や茶学術研究会のシンポジウムなどでも、本の話をする機会をいただいた。また歴代の医薬書を茶ひとつで縦断した革新性を評価し、影印史料の有用性から座右の書としたいなどのお言葉もいただいた。本当にありがたく、これからも研究に一層励みたいと思う。そして、この小さな一書が読者の方々にとって真実を知る縁となり、収録する史料から新たな真実を発見する一助ともなることを、ひそかに祈っている。いつの日にか「見ぬ世の人の友」となることも。

（元東京国立博物館科学研究費特別研究員）

蘭亭が語るもの

亀田和子

海外に暮らして、今年で二三年目。人生の半分以上である。美術史の研究を始めたハワイ大学で修士号を取得したのが二〇〇二年。その頃、私は『アート・ブルティン』（二〇〇一年三月刊行）に掲載されているような、「様式論に凝り固まって保守的な日本の日本美術史研究」という欧米の批評をかなり信じていた。ところが、現在の所属であるバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学博士課程に入学する前に、一年間京都大学に留学したとき、日本の美術史研究を自分の目で確かめて敬服した。それは実際に作品に触れなければできない、作品への愛情に満ち溢れた研究であるからだ。私の日本の研究に対する尊敬の念は、二〇〇八年夏、京都国立博物館での研修中にさらに深まった。所蔵品のあまりの素晴らしさに感動して、熱にうかされたみたいだった。研究員の先生方の作品を理解する能力に圧倒された。

しかし、研修が終わって、学んだことを所属校の指導教官の一人に報告すると、「作品に溺れるな。美術史は理論的に語らなければならぬ」と叱られた。その教授はマヤ美術の専門家ですト・コロニアル理論を極めている。欧米で「非西洋美術」を語る

際、必ずといっていいほど持ち込まれるのがこの手の理論であるが、日本のように植民地化されなかった非西洋の場合、語り口は難しい。例えばW・T・Jミッチェルは、視覚文化論における、支配者が被支配者の美術を語るときに内在する罪悪感について言及しているが、日本美術はこのような方程式に当てはまらない。全く別の解決法を見つけないと日々感じる。日本と海外では日本美術に対する解釈におびたらしいギャップがあるが、それを少しでも縮めるのが、海外在住の日本人研究者の使命ではないだろうか。自分の研究が日本と海外をつなぐ伝書鳩の役目を務めることができれば本望である。

私はもう何年も蘭亭図の研究に夢中になっている。蘭亭図とは、中国東晋の書聖・王羲之が文雅の名士四十一人を会稽山の蘭亭に招いて、曲水宴を行ったときに彼らが詠んだ詩集の序文として書いた『蘭亭序』を絵画化した作品である。盃がブカブカと水面に浮かんでいたり、あるいは激流を滑っていくのを見つけると誰が描いた作品でも気にかかる。江戸時代、どの画派の絵師も蘭亭図を描いた。狩野派、文人画、円山・四条派、などなど。欧米で仕込

まれた脱構築の理論に従うと、一人の絵師に執着することが許されない。天才芸術家を構築してエリート社会に貢献するつもりかと酷評される。そこで、主題をしぼって様々な画派の絵を比べると、ひとつの画派にこだわっては見えない時代性が見えてくる。それは、絵師たちが画派という境界線を越えて、互いにそのモチーフや構図だけではなく、思想や意識といった情報をも交換し共有していたということである。

ところで、近年、世界中で蘭亭への関心が高まっているような気がしてならない。どうして、今、蘭亭なんだろう？ それは、現代の文化人たちがひしひしと押し寄せる危機をそれとなく感じとっているからではないか。日本では、「戦争は終わった」と言い聞かされて子供たちは育ち、大人になってもそう信じさせられている。しかし、国際的にみると、戦争は全然終わっていない。冷戦時代が終わる次第、私達が生きている現代はテロ時代に移り変わった。海外に暮らしているとホット・アンド・コールドで戦争が続いているのを実感する機会がよくある。

王羲之は、戦乱の時代に名門貴族として生まれた。幼いときに両親を亡くし、親戚によって養育される。彼が一六歳の時、育て親の一人であった王敦が、朝廷に対して反乱を起こした。もう一人の育て親であり、王氏の族長、朝廷においては宰相であった王導がその企てを阻止するために軍隊を率いて、王敦を殺害する。王羲之は、どんなに悲しかっただろう。一族の義務を果たすために右軍將軍という官位につくが、生涯隠遁生活に憧れたのは、戦

争が大嫌いだっただけではないか。

戦争が起こって一番困るのは文化人である。徳川幕府の支配下で、蘭亭を描いた絵師の中にも武力に押さえつけられて辛い思いをした人が実に多い。そのような絵師たちのメッセージを、思想の全く違う欧米の人々に、彼らに共感してもらえるように伝えなければならぬ。そこで、ホロコーストではほぼ全滅したフランクフルト学派の生き残りアドルノが、もう二度とあんな惨事がおきないようにと願って唱えたポスト・ホロコースト哲学の美意識理論を応用して、武力を行使するシステムに対抗した江戸時代の文化人たちが、蘭亭図にこっそり隠した視覚コードを読み解くのが私の課題だ。

後の今を視るも、亦た由お今の昔を視るがごとし。悲しいかな。故に時人を列叙し、其の述ぶる所を録し、世殊なり事異なると雖も、懷を興す所以は、其の致は一なり。後の攪る者、亦た將に斯の文に感ずる有らんとす。

初めてこの『蘭亭序』の末文を読んだとき、雷に打たれたような気がした。王羲之が私に話しかけているのだと思った。私も王羲之がしたように、自分が生きている時代の人々のことを書きとめておきたい。なぜなら、現代人がどのように先学を視ているかを記録することによって、未来の人々に私たちの時代を知ってもらえるからである。今、蘭亭を語るということは、テロ時代の真只中で平和を願う現代文化人の反戦ステートメントなのだ。

(ブリティッシュ・コロンビア大学大学院博士課程)

源氏物語千年紀にあたる二〇〇八年は、私の喜寿の年でもあったが、秋からは体調悪く、大腸癌で入院してしまった。だから、十一月一日、天皇皇后両陛下下行幸啓の下、この日を「古典の日」に定めようと誓い合った現場にいなかったのは残念であった。

ところで、私が原文ではないが、『源氏物語』を通読したのは、中学二年生、一九四五年の敗戦の年、ソ聯軍占領下の旧満州（現在の中国東北部）の奉天（瀋陽）においてであった。ソ聯兵や中国人の乱入を避けて、固く扉を閉ざし、特に女性には地下で息をひそめて生活していた頃、退屈でもあったので、家にあった谷崎潤一郎の『源氏物語』（旧訳）を読み耽っていた。小学生の時から「少年講談」をはじめ、江戸川乱歩、野村胡堂、横溝正史などの小説を乱読していた私には、潤一郎訳の『源氏物語』が格段に難解であるとも思われなかった。

しばらくすると、街も少しは落ち着いて来たので、暇な時は、路上に本を並べて売ったり、同じように露天に並べて売られている本を買ったりしていたが、ある時、與謝野晶子の『新訳源氏物語』（二冊本）を買って、谷崎訳と読み比べ、その違いをおもしろがっていたのが、古典研究者になった原点かもしれない。

秋も深まり、日本人中学校も再開したが、夏休み前までは正しいこととして教えられていた教科書の所々を墨で塗

源氏物語千年紀・古典再生に向けて〈最終回〉

読書の楽しみの中の古典文学



片桐 洋一

(大阪女子大学名誉教授)

りつぷす作業から始まるのだから、素直に勉強する気にもなれない。源氏物語の翻訳の比較研究？に厭きると、日本文学全集の類から、徳富蘆花・永井荷風・高見順・武田麟太郎・石川達三・川端康成・横光利一・梶井基次郎・牧野信一などを読んでいた。戦時中に読めなかったという渴望もあって、熱心なものであった。

『源氏物語』は確かにすばらしい古典であり、「古典の日」を国民の祝日にするのも文化国家として誇らしいことではあるけれども、「源氏物語」を読め、「古典を尊重せよ」と声高に言うのは意味がない。高校生も大学生も、今はほとんど本を読まなくなっている事態をまず直視しなければならぬ。「古典」を読む前に、本を読む癖をつけるべきであろうが、それは家庭教育と、友人相互の啓発に負うところが多い。しかし、現代はその二つが最も欠けているのではないか。

加えて言えば、私は大学に勤務して三十年以上も「国語」の入学試験に関与して来たが、『源氏物語』の原文を出題したことは一度もない。「源氏物語」の原文は、大学の入学試験に出題するには難しい。テレビを賑わしている「〇か、×か」というようなクイズ番組ならともかく、内容のある問題を『源氏物語』から出すのは無理である。先人はこんなふうに考えていたのだなあと実感できるような文章は、『源氏物語』以外にも多いのである。

書評・紹介一覧 6～7月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
明治前期の教育・教化・仏教	(書)『史林』第92巻3号(島蘭進)	朝鮮近現代史を歩く (紹)神戸新聞 7/5(門野隆弘)
	(書)『宗教研究』第360号(林淳)	武士の精神とその歩み
酔うて候 河鍋曉斎と明治の書画会	(書・記)神道フォーラム 28号	
	(紹)毎日新聞 7/5(木下直之)	江月宗玩 欠伸稿訳注 乾
畿内の豪農経営と地域社会	(紹)中外日報 7/28	
	(書)『日本史研究』563号(松永友和)	茶の医薬史
日本古代の伝承と歴史	(紹)『茶』(静岡県茶業会議所) 7月号	
	(書)『古代文化』第576号(平林章仁)	神社継承の制度史
蓬萊山と扶桑樹	(紹)神道フォーラム 28号	
	(紹)『古代文化』第576号(森岡秀人)	九州の蘭学
日光東照宮の成立	(紹)大分合同新聞 6/21	
	(紹)『歴史地理学』245号(西海賢二)	(紹)南日本新聞 6/28
		(紹)日本経済新聞(西部版) 7/11

6月から7月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
藤 村 庸 軒 年 譜 考	白崙顕成著	1456-3 C3021	36,750	6
祈 り の 文 化	信多純一著	1425-9 C1039	3,675	6
九 州 の 蘭 学	W.ミヒエル・鳥井裕美子・川眞真人編	1410-5 C1021	2,625	6
武 野 紹 鷗 わ び の 創 造	戸田勝久先生喜寿記念論集刊行会編	1471-6 C3076	12,600	6
松前景広『新羅之記録』の史料的研究	新藤透著	1466-2 C3021	12,600	6
風 俗 絵 画 の 文 化 学	松本郁代・出光佐千子編	1469-3 C3039	6,825	7
禪 語 辞 典 (7 刷)	古賀英彦編著	0656-6 C1580	9,975	7

6月から7月にかけて刊行した継続図書

シ リ ーズ 名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
禁 裏 ・ 公 家 文 庫 研 究	3	3		1414-3 C3324	12,390	6
尾 陽	5	5		1474-7 C1370	3,150	6
別府大学文化財研究所企画シリーズ	2	2	キリシタン大名の考古学	1472-3 C3021	3,990	7

継続図書の既刊情報

シ リ ーズ 名	巻数	巻タイトル	ISBN4-7842	定価	発行年月
禁 裏 ・ 公 家 文 庫 研 究 尾 陽	1		1143-8	10,290	2003年4月
	2		1293-0	10,290	2006年4月
	1		1222-1	3,150	2005年1月
	2		1240-X	3,150	2005年5月
	3		1331-7	3,150	2006年11月
	4		(978-4-7842) 1406-8	3,150	2008年10月
別府大学文化財研究所企画シリーズ	1	経筒が語る中世の世界	(978-4-7842) 1409-9	5,040	2008年5月

(表示価格は税5%込)

営業部より

▼リニユーアルした『鴨東通信』。広報紙という役割はもちろん、お客様が満足できる誌面づくりを目指していきます。リニユーアルと言えば、我々出版業界も古くからの体制を見直す試みが。何が起こるかわからない世の中。業界のリニユーアルに対して、小社もアンテナを張り巡らし、鋭意努力していきます。(I)

☆フェア情報

八重洲ブックセンター(東京都中央区)
歴史書懇話会「僅少本」フェア

9月上旬～9月末ごろ

☆学会出店情報

小社刊行図書を展示販売

※出店日は変更の可能性有

日本宗教学会(京都大学)

九月十二日(土)・十三日(日)

歴史地理学会(神戸大学)

九月十九日(土)・二十日(日)

日本古文書学会(足利商工会議所友愛会館)

九月二十六日(土)・二十七日(日)

日本史研究会(佛教大学)

十月十日(土)・十一日(日)

教育史学会(名古屋大学)

十月十日(土)・十一日(日)

東洋史研究会(京都大学)

十二月三日(祝)

編集後記

▼国立歴史民俗博物館で、水木コレクションの展示が開催されたのは九八年。千葉出身の私は、当時地元にながらそのことはまったく知りませんでした。今回、その魅力に触れ、本当に惜しいことだと思います。本書に出会えたことがとても救いです(M)

▼新装『鴨東通信』はいかがでしたか？この夏、近代古都研究会の先生方と、鹿ヶ谷音楽寺さんのカボチャ供養に伺いました。美しいお庭と、地元小学生のほほえましいお運びさんに心が洗われました。(R)

▼最近、大学営業が増えてまいりました。蔵書状況を調査し、案内することが主ですが、折角ですので研究室のドアを突然ノックすることもございます。ご迷惑かと存じますが、ご挨拶させていただきますと幸甚です。(J)

▼来年は洪庵生誕二〇〇年。北浜の適塾に立つ銅像は、本物によく似ていると子孫のかたのお墨付きだったそうです。多くの著名人が若者時代を過ごした適塾に、一度足を運んでみてはいかがでしょう。(N)

▼小学一年生の娘は、今年がはじめての夏休み。冷夏とはいえ、彼女と一緒に久しぶりに夏らしい夏を過ごすことができました。(h)

▼表紙図版「奈良名勝全図」(部分、個人蔵)／『文人世界の光と古都奈良』より

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(3・6・9・12月)刊行しております。
代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうつうしん

鴨東通信 四季報 No.75

2009(平成21)年9月5日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒606-8203

京都市左京区田中閼田町2-7

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

シリーズ古典再生2

日本の心と源氏物語

岡野弘彦編

【10月刊行予定】



古事記や万葉集に表現される神話時代の男女の姿のなかなには、神を育て、神に添って、神の意志を普遍化するという女性特有の聖なる力が見いだせる。それこそが、『源氏物語』の男女の恋にも続いている、日本人のロマン性を持ったあこがれのような思い、心の基層である――

宮中歌会始の選者を永年務めた編者が、師である折口信夫が体系化できずに終わった「いろこのみの道徳」論に向きあい、『源氏物語』に流れる日本の心を読み解く。

内容

源氏物語に流れる日本人の心の伝統

『源氏物語』が内包するいにしえびとの心／『源氏物語』は日本の物語の原型／『源氏物語』へとつながる神話の古層／和歌の世界と物語の成立／平安文学の中の『源氏物語』／原源氏物語を構想した折口信夫／怨霊信仰と鎮魂の歌

『源氏物語』(グレート・ブックス)の演習方法と実際 (須賀由紀子)

(松田義幸)

『源氏物語』の感染教育力 (犬塚潤一郎)

ネットワーク時代の『源氏物語』 (江藤裕之)

▼四六判・二七〇頁／定価一、八九〇円 ISBN978-4-7842-1412-9
おかのひろひこ……大正一三年三重県生まれ。歌人、日本芸術院会員、國學院大學名誉教授。著書に『折口信夫伝 その思想と学問』(中央公論新社)『恋の王朝絵巻 伊勢物語』(淡交社)など。

シリーズ古典再生1

一千年目の源氏物語

伊井春樹編

たんなる古典復興ではなく、それらの作品を現代の眼でもう一度見直して再生することを目指して開催された東京・京都のシンポジウムをもとにし、斯界の識者による「源氏物語論」を集約。

内容

近江の君について

(大岡 信)

「いろこのみ」の女神と光源氏

(岡野弘彦)

昭和が発見したもの

(丸谷才一)

私にとっての「源氏物語」

(加賀美幸子)

シンポジウム「一千年目の源氏物語」

『源氏物語』の宗教性

(山折哲雄)

『源氏物語』と京ことば

(中井和子)

『源氏物語』と寝殿造

(川本重雄)

『源氏物語』をめぐる人々

(伊井春樹)

シンポジウム「私の源氏物語」

▼四六判・二五二頁／定価一、六八〇円 ISBN978-4-7842-1408-2



源氏物語 千年のかがやき

国文学研究資料館編

新出の国文学研究資料館蔵『源氏物語団扇画帖』全54枚をカラーで掲載し、詳細な解説を付す。あわせて図様が近似する他の源氏絵についても参考資料として多数掲載。描く・書き写す・鑑賞するという3つの観点から、源氏物語が千年間どのように享受されてきたのか、豊富なカラー図版で紹介する。

▼A4判・一六八頁／定価一、九九五円 ISBN978-4-7842-1437-2

東アジアのなかの日本

【10月刊行予定】

上田正昭 著

折口民俗学を継承する著者の昨今の論文や講演録などを選んで収録。日本列島の歴史や文化の実像をよりあややかにするために、海を媒介とするアジアとのかかわり、とりわけ東アジアとの関係を重要なテーマとしてきた著者がまとめた最新の一書。

▼四六判・三七〇頁／定価11,150円
ISBN978-4-7842-1479-2

【内容】

I 回想・二十世紀／日本とアジア／古代日本の輝き／探訪―新羅古碑／東アジアのなかの京都盆地／嵯峨野と秦氏

II 神々のふるさと／神秘の霊石／稲荷神の由来／神も仏も―日本文化の特質／死をみつめて生きる

III 鎮守の森の現在と未来／北ツ海文化と海上の道／銘文研究二十年と古代史／鎮守の森と南方熊楠／ひとりひとりが文化財を守る

IV 地域史の再発見／倭国から日本国へ／歴史のなかの聖徳太子像／飛鳥廻望／『播磨国風土記』の特色／『風土記』の人びとと生活

V 和歌のころ／保津川開削と了以／素庵／朝鮮通信使と鼻塚



うえた まさあき：一九二七年生まれ。京都大学名誉教授。主な著書に『上田正昭著作集』全八巻（角川書店）ほか著書59冊、監修・編共著40冊。

古代日本の輝き

上田正昭著

日本の歴史と文化を支えている「古代的精神・古代的要求」とはなにか／広くアジア史をも視野に入れた著者が、喜寿の節目にまとめた一書。

▼四六判・三〇〇頁／定価一、七八五円
ISBN4-7842-1167-5



正倉院宝物に学ぶ

奈良国立博物館編

日々、宝物の保存と修理に携わる宮内庁正倉院事務所の研究者をはじめ、東大寺・奈良国立博物館ゆかりの国内外の研究者が、正倉院研究の現在、8世紀の東アジア文化、宝物の保存・伝承の3つのテーマで報告・討論。正倉院宝物の精粹がわかる一書。

▼四六判・四二八頁／定価三、一五〇円
ISBN978-4-7842-1439-6

蓬萊山と扶桑樹

岡本健一著
日本文化の古層の探究

「蓬萊山」のイメージと、生命更新の仙木「扶桑樹」のシンボルが、日本の古代文化におよぼした影響の諸相を、「前方後円墳」「蓬萊山起源」説を提唱してきた著者が、歴史考古学的に明らかにする。

▼A5判・四四二頁／定価五、七五〇円
ISBN978-4-7842-1400-6

博伝の来た道

白鳳期仏教受容の様相

後藤宗俊著
「博伝の来た道」をたどり、そこにめられた祈りの諸相を明かし、その途上に浮かび上がる玄奘・道昭などの僧の信仰と人間像に迫る。大分の虚空蔵寺跡の調査に携わった著者が考古・美術史・文献史など学際的に探る。

▼A5判・三二二頁／定価五、九八五円
ISBN978-4-7842-1433-4

日本古代都市史研究

古代王権の展開と変容

堀内明博著
永年、平安京などの都市遺跡発掘調査に携わった著者の研究成果。王朝都市から中世前期都市まで、都城の展開と変容過程を時系列的に分析し、古代王権のあり方を考古学の結果を踏まえて解明した一書。掲載図版多数

▼B5判・五一四頁／定価一五、七五〇円
ISBN978-4-7842-1457-0

日本古代の伝承と歴史

渡里恒信著

『続日本紀研究』などに掲載されてきた諸論考をまとめる。大化前代における王権と氏族の諸論考を「古事記」と「日本書紀」などの伝承史料から解き明かした論考を第1・2篇に収録し、第3篇では平安初期の特徴的な君臣関係をテーマとして取り扱う。

▼A5判・三二二頁／定価六、二〇〇円
ISBN978-4-7842-1403-7

翁の生成

渡来文化と中世の神々

金賢旭著
中世の翁信仰の生成過程を諸縁起や史料から読みとること、そこに色濃く反映された韓半島からの渡来文化の姿を見いださ、さらに日本芸能のルーツである翁猿楽の成立についても、韓半島のシャーマニズム文化の影響を指摘する。新たな目録交史史。

▼A5判・二五〇頁／定価五、二五〇円
ISBN978-4-7842-1411-2

神社継承の制度史

神社史料研究会叢書V

檀山林繼・宇野日出生編
神社史料研究会（代表・橋本政宣氏）の研究結果のシリーズ最終巻。古代より近代にいたるまで神社が継承されてきた諸問題について、主に制度史としての視点で論究した珠玉の論文9篇を収録。

▼A5判・三四八頁／定価七、八七五円
ISBN978-4-7842-1418-1

美国・師光全歌注釈

小田 剛著

【最新刊】

本書は、千載・新古今歌人の一人である藤原実国（保延六年・寿永二年、源師光（生没年未詳）の全歌注釈を試みたもの。実国は千載集以下の勅撰集に計二三百入り、神楽も能くした。師光は千載集以下の勅撰集に計二七首入り、千五百番歌合の判者も務めた。注釈は、校異、語注、（口語）訳、本歌、本説、補説・参考事項、参考（歌）、類歌を掲載。巻末に解説、年譜、実国・師光歌一覧、勅撰集・私撰集収載歌一覧、歌合等収載歌一覧、索引（全歌自立語総索引／五句索引／歌題索引／主要詞書索引）を収録。



おだ たけし：神戸大学大学院修士課程修了。中世和歌文学専攻。著書『式子内親王全歌注釈』『守覚法親王全歌注釈』『小侍従全歌注釈』など。

▼A5判・六〇八頁／定価一八、九〇〇円 ISBN978-4-7842-1478-5

禁裏・公家文庫研究 第三輯

田島 公編

勅封のため全容が不明であった東山御文庫本を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収載本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第三輯。【執筆】田島公・飯倉晴武・桃崎有一郎・松澤克行・小倉真紀子・西本昌弘・渡辺滋・藤原重雄・三島暁子・小倉慈司

▼B5判・四九〇頁／定価一一、三九〇円 ISBN978-4-7842-1414-3
【既刊】第一輯・二輯 定価（各）一〇、二九〇円

中世史料学叢論

藤本孝一著

文化庁主任文化財調査官を務め、史料学の現場で調査・研究に携わってきた著者が四〇年の研究成果をまとめた一書。古文書学を中心に、平安時代の政治・社会・文化から、中世・近世の史料考証におよぶ論考には、著者の豊かな学識と経験に裏打ちされた学問世界が広がる。

▼A5判・四四四頁／定価九、四五〇円 ISBN978-4-7842-1455-6

金瓶梅研究

佛教大学研究叢書6

荒木猛著

『水滸伝』『西遊記』『三国志演義』とならんで中国四大奇書の一つ『金瓶梅』。これまで淫書と目され禁書扱いであったためか、他の小説と比べて最もその研究が遅れていた。本書では、明代の政治・社会の腐敗を暴露した作者不明のこの小説を、執筆時代・素材・用語・服装など様々な側面から考察し明らかにする。

▼A5判・四九四頁／定価八、九二五円 ISBN978-4-7842-1442-6

松前景広『新羅之記録』の史料的研究

新藤 透著

中世から近世初期の北方史研究における最重要史料『新羅之記録』について、はじめて本格的に書誌学的に考察を試み、その史料価値を明らかにする。書名の読み方・その著者、写本の収集・分類、著者の使用史料、記述内容の信憑性、後世に編纂された史料に与えた影響、の五課題を設定し、綿密に考証する。

▼A5判・五一八頁／定価一一、六〇〇円 ISBN978-4-7842-1466-2

幸田露伴の世界

井波律子・井上章一共編

国際日本文化研究センター（日文研）で行われた共同研究の成果一三篇。露伴は明治・大正・昭和にわたりすぐれた作品を残した。本書は、さまざまな分野の研究者が、小説や評論など文学面はもちろん、都市・遊技・旅行・自然観察・人生論等の著作を通じて多様な角度から露伴にアプローチする。

▼A5判・三二八頁／定価五、二五〇円 ISBN978-4-7842-1444-0

漱石と世界文学

坂元昌樹・田中雄次・西慎偉・福澤清編

「世界文学」において漱石をとりえなおす」という視点のもと、夏目漱石が世界文学を意識し、その影響を受けた検証に加えて、日本文学を含め世界文学に与えたインパクトや、世界で漱石文学が翻訳のかたちでいかに受容されたのかなどをも見極めた九篇。漱石ゆかりの熊本大学を主とした共同研究の成果。

▼四六判・二六二頁／定価一一、九四〇円 ISBN978-4-7842-1460-0

禅語辞典

【7刷出来】

入矢義高・古賀英彦編



禅語録中の難解な語句すべて（約五、五〇〇）について、平易なことはで解釈を施した画期的な辞典。いわゆる漢文の語法では読めない漢語の解説が備わり、禅宗寺院・茶道家・宗教史研究者は勿論のこと漢文を読むすべての人に必携の書。待望の増刷。

▼A5判・六〇〇頁／定価九、九七五円 ISBN4-7842-0656-6

江月宗玩 欠伸稿訳注 乾

かんしんこう

芳澤勝弘編著

江月宗玩の語録『欠伸稿』の龍光院蔵自筆本を翻刻。分量的には、影印で刊行されている写本『孤蓬庵本』のほぼ半分だが、『孤蓬庵本』にはない偈頌などを収録する。そのなかには私的なものも多く、江月の人柄を示すとともに、多くの文化人との交流を記録しているため、文化人の消息を窺う貴重資料ともなっている。

▼A5判・六四六頁／定価九、九七五円 ISBN978-4-7842-1462-4

茶の医葉史 中国と日本

岩間眞知子著

もともと茶は薬であった。日本と中国の歴代医葉書の中には茶の記事があり、茶の効能・処方のはか異名・産地・製法も記され、古辞書や『茶経』『茶譜』など茶書の抜粋も収録された非常に貴重な史料である。本書は、日中の医葉書史料の影印を多数収録。それらの史料から日中の各時代における茶の様相とその歴史的変遷を明らかにする。

▼A5判・五二六頁／定価九、四九〇円 ISBN978-4-7842-1463-1

藤村庸軒年譜考 (全2冊)

白奇顕成著

備考・藤村庸軒（六一三～九九）は、広い教養と卓越した美的センスにより、漢詩・和歌・作庭・花道・茶具の制作に才能を発揮した。本書は、庸軒の生涯を文献学的方法にもとづき、歳ごとに明かした異色の年譜考。茶道を軸とした近世文化史の魅力之余すところなく伝える一書。

▼A5判・総一八四八頁／定価三六、七五〇円 ISBN978-4-7842-1456-3

蘭室藤村正員年譜考

白奇顕成著

庸軒流茶道の祖、藤村庸軒の三男藤村正員（一六五〇～一七三三）の事跡について、自著「蘭室草」の収録作品に沿って、生涯の動向を歳ごとに明かした異色の年譜考。父庸軒は一族との交流や、広汎な諸資料にもとづいた京坂の茶人・文人たちとの交わりは、茶道を軸とした近世文化史の一面面を伝える趣きを備えた一書。

▼A5判・四八〇頁／定価六、〇九〇円 ISBN4-7842-1173-X

武野紹鷗 わびの創造

戸田勝久先生喜寿記念論集刊行会編

裏千家今日庵業株で永年茶の湯研究に従事してきた戸田勝久先生の喜寿を記念し、武野紹鷗を基軸とした斯界の論者二十四人による論集。
【内容】紹鷗像とその茶の伝統／禅と文芸／好みとわびの表現／武野紹鷗研究に寄せて

▼A5判・六一四頁／定価一一、六〇〇円 ISBN978-4-7842-1471-6

茶の湯 連翹抄

戸田勝久著

裏千家の茶家戸田即日庵に生れ、父は今日庵名誉教授直翁宗寛、尾張徳川家の世臣であったが、瓦解の後東京に移居して茶家となった。今日庵業株として三代を経る。教授者（茶名宗安）と併せて、茶の湯の研究に従事し、平成一七年三月まで茶の湯文化学会副会長の任にあった。本書はその業績の集大成。

▼A5判・二六〇四頁／定価一、九八〇円 ISBN4-7842-1267-1

原三溪翁伝

三溪没後七〇年
横浜開港一五〇周年記念出版

【11月上旬刊行予定】

藤本實也著

原三溪(1868-1938)は、生糸貿易や製糸業で活躍した横浜の事業家。美術・茶道に造詣が深い文化人・パトロンであり、広大な私邸を三溪園として一般公開し、関東大震災後の横浜の復興に尽くすなど、社会事業家としても活動した。藤本實也が戦時中にまとめ、稿本のままで活字化されていなかった幻の原稿『原三溪翁伝』を、横浜開港一五〇周年を記念して、校訂を加えて刊行。

▼A5判・九三六頁／定価一六、八〇〇円

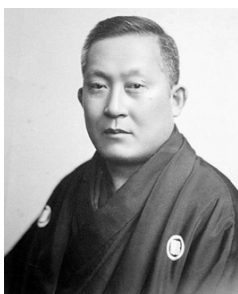
ISBN978-4-7842-1476-1

【内容】

第1篇 事業と生涯 総叙／家系／生立／立志遊学／横浜原家に入る／原合名会社を組織／原輸出部創立／製糸業の兼営／蚕糸業外の関係事業／家庭／終焉

第2篇 公共貢献 蚕糸業界に於ける功績／七十四銀行の破綻と救済／関東大震災後の復興／公共事業の援助及復興整理関係／横浜大御所／三溪園／日本美術の振興

第3篇 性格と趣味 性格／趣味



原三溪



三溪園(外苑)

【解説】藤本實也と『原三溪翁伝』の世界(内海孝)／途上国日本の生糸と横浜売込商(根岸秀行)／安田軼彦の聖徳太子像 原三溪旧蔵《夢殿》再考(柏木智雄)／下村観山と原三溪にみる作家と支援者の関係(清水緑)／原三溪の展覧——院展図録の記述から(八柳サエ)

ふじもと じつや……一八七五—一九七〇。農学博士。関東大震災後、横浜生糸検査所技師を辞職し、生糸貿易研究のため著作に打ち込む。

萬象録

高橋常庵日記(全9巻・既刊8冊)

大濱徹也・熊倉功夫・筒井紘一校訂

三井銀行・三井呉服店に勤務、三越百貨店の誕生に貢献した常庵。引退後はもっぱら茶の湯の研究、啓蒙活動に傾注し、近代茶道鼓吹の第一人者とされた。本書は、常庵の明治45年から大正10年までの日記で、内容は政治・経済・文化・美術など多岐にわたる。最終巻(未刊)には解説・総索引を付す。

▼A5判・平均四五〇頁／既刊揃定価六九、三〇〇円

光芒の大正

川内まこと文学館蔵
山本實彦関係書簡集

改造社関係資料研究会編 大正デモクラシーの幕開けとともに、時代の寵児となった雑誌『改造』を創刊した山本實彦。川内まこと文学館所蔵の山本實彦または改造社宛に届いた書簡のうち、『改造』が最も華々しく光り輝いた大正8年から昭和5年までの書簡を詳細な解説とともに活字化。薩摩川内市と鹿児島純心女子大学で結成された研究会による共同研究成果。

▼A5判・二九〇頁／定価五、二五〇円 ISBN978-4-7842-1459-4

武士の精神とその歩み

エトス

武士道の社会思想史的研究

A・ベネット著 武家政権の誕生から、明治維新に伴う身分制度の廃止に至るまでの、武士文化の発展と変遷の過程を考察。文化人類学者のギアツによる宗教の定義を援用し、各時代における武士の精神を精査することで、武士の気風や動機などが、どのように進展していったか、その過程を明らかにする。

▼A5判・二九六頁／定価五、〇〇〇円 ISBN978-4-7842-1426-6

増補 郷土教育運動の研究

伊藤純郎著

長らく品切れだった旧版に1章を加えて再版。昭和恐慌が深刻化し、郷土の立て直しをはかる自力更生が叫ばれていた一九三〇年代に展開された郷土教育運動の歴史的意義を、柳田国男の郷土研究論と関連させながら、運動を推進した文部省、文部省とは異論を唱える郷土教育連盟、実際にそれをおこなう地域社会の反応を通じて、実証的に解明する。

▼A5判・五〇六頁／定価一〇、二九〇円 ISBN978-4-7842-1402-0

緒方洪庵

——幕末の医と教え——

中田雅博（産経新聞文化部記者）著

【9月下旬刊】

生誕200年記念 (2010年)



失われた医のモラルを問う

●幕末の医学界に大きな足跡を残した緒方洪庵が、二〇一〇年に生誕二〇〇年を迎える。本書は記念の年を前に、第一線の新聞記者である著者が、洪庵関係の資料を精査、綿密な取材の下に産経新聞紙上に連載した『適塾再考』を全面改訂し、再構成した。

●開国とグローバルライゼーションの激動の時代に「医は仁術」をすすんで実践し、適塾で弟子の教育に身を捧げた洪庵の軌跡を、平易な文章で詳細にたどる好著。後半部分では適塾門下生の活躍に光をあて、巻末に門下生のくわしい一覧表を収録する。

●名利を求めず、近代日本の礎を築いた多くの人材を育てあげた洪庵の生き方は、現代人にとって未来を指し示す大いなる道しるべである。

●目次●

- I 洪庵の修業時代
 - 一 医師になりたい
 - 二 天文・物理を学ぶ
 - 三 医学・薬学を学ぶ
- II 適塾と緒方メース
 - 一 幕末という時代に
 - 二 塾生の生活
 - 三 教育者・洪庵
 - 四 塾生の母・八重
- III 蘭学医として
 - 一 洪庵はどんな医師か
 - 二 西洋医学書を翻訳する
 - 三 医療倫理を示す
 - 四 天然痘との戦い
 - 五 コレラとの戦い
 - 六 洪庵、江戸へ行く
- IV 適塾の群像
 - 大村益次郎／武田斐三郎
 - ／渡辺卯三郎／佐野常民
 - ／杉亨二／大島高任／橋本左内／大島圭介／長与専斎／福沢諭吉／野村文夫／高松凌雲
- 付属資料
 - 緒方洪庵年譜
 - 緒方洪庵の著書・翻訳書等一覧
 - Duties of Physicians
〔扶氏医戒之略の英訳〕
 - 適塾門下生一覧

▼A5判・四〇〇頁／定価二、六二五円

ISBN978-4-7842-1482-2

洪庵・適塾の研究

梅溪昇著 洪庵と両親の画像、夫人八重の生涯、適塾解体修理、洪庵と福沢諭吉・大隈言道・古賀茶溪・秋原広道・戸塚静海などとの交流のほか新史料の紹介も織りまぜ、適塾研究の第一人者が洪庵と適塾をめぐる縦横にとりくんだ一書。口絵（カラー1頁・モノクロ7頁）と人名索引を併載。

▼A5判・五四〇頁／定価一、一六〇円
ISBN4-7842-0766-X

続洪庵・適塾の研究

梅溪昇著 適塾研究第一人者による研究成果の続編。折りに触れて書き継がれてきた諸論稿と雑誌『適塾』に掲載された史料紹介などをまとめる。

▼A5判・七二六頁／定価九、九七五円
ISBN978-4-7842-1388-7

大坂学問史の周辺

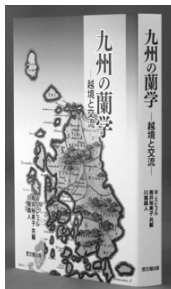
梅溪昇著 近世の上方学問・文化の基礎となつた含翠堂と懷徳堂は、商都大坂の町人たちにとって「開かれた和漢学書」であり、独自の色合いをもつて進取の学風を生み出し、多彩な足跡を残した。新しい知見を加え、この二学舎の諸側面にふれ、あわせて関係記録も収録した、大坂学問史の一端を明かす好著。

▼四六判・一一一〇頁／定価一、四一五円
ISBN4-7842-0640-X

九州の蘭学

越境と交流

ヴォルフガング・ミヒエル・鳥井裕美子・川眞人編
近世、西洋への唯一の窓口であった長崎及び九州各地で、人々が在来の学術とは異なる西洋近代科学にどう向き合い学び取り、世のため人のために役立てたのか、あるいは来日した西洋人が、知的交流や技術移転にどれほど貢献したのかを、最新の研究成果に基づき、彼らの業績と足跡を通して明らかにする。江戸時代前期から幕末まで、総五九人を取りあげて人物ごとに紹介。



◆四六判・三八〇頁／定価二、六二五円 ISBN978-4-7842-1410-5

キリシタン大名の考古学

別府大学文化財研究所企画シリーズ②「ヒトとモノと環境が語る」
別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会編
近年、大分の豊後府内の遺跡や大村氏の城館・城下の遺跡、島原の原城跡などの調査が進み、キリシタン考古学研究は新しい段階に入っている。単に考古学的成绩をまとめるだけでなく、領域を越えて、文献学や分析科学など他領域の成果も融合し、新しい戦国城下論、キリシタン考古学論・流通論など、新たな研究方法を提示する。



◆B5判・一七八頁／定価三、九九〇円 ISBN978-4-7842-1472-3

日本の朝鮮・台湾支配と

松田利彦・やまだあつし編

植民地官僚

国際日本文化研究センターでの共同研究の成果。

【内容】植民地官僚の出自／植民地官僚と政策形成／植民地官僚のメンタリティーと政策思想／「帝国」と植民地官僚

◆A5判・七五六頁／定価一、六五〇円 ISBN978-4-7842-1451-8

立憲国家中国への始動

明治憲政と近代中国

曾田三郎著 従来の単線・単純な辛亥革命史研究の枠組みを打開すべく、立憲国家中国の形成という観点から叙述する中国近代史。

【内容】日露講和問題と海外政治視察団の派遣／海外政治・憲政視察団の派遣と日本／編纂官制館・憲政編纂館と官制改革案の作成／官制改革の推移と日本／日本人／地方官制改革と省行政組織の改編 ほか

◆A5判・四〇〇頁／定価八、五〇〇円 ISBN978-4-7842-1464-8

青島の都市形成史：1897-1945

樂玉璽著

市場経済の形成と展開

青島がドイツ・日本との間に持った経済関係や、その関係が築かれた歴史的要因、青島の経済発展の過程や特徴、さらに青島が全中国へ与えた影響を解明。日中両国の広範な資料を用いることにより、詳細かつ中立的・客観的な立場での考察を試みる。

◆A5判・三六四頁／定価七、一四〇円 ISBN978-4-7842-1453-2

条約改正交渉史 一八八七～一八九四

大石一男著

1887年～1894年にかけて、日本側の交渉戦略・交渉戦術、交渉相手の欧米列国の動向、日本国内における諸個人・諸集団の協力・対抗・競合の側面、の3つの視覚から分析する。

【内容】大隅交渉の出発／大隅交渉における「列国協調」と廃棄戦術／大隅交渉における帰化法の意味／青木外相期の条約改正問題 ほか

◆A5判・三五六頁／定価六、八二五円 ISBN978-4-7842-1419-8

美の縁

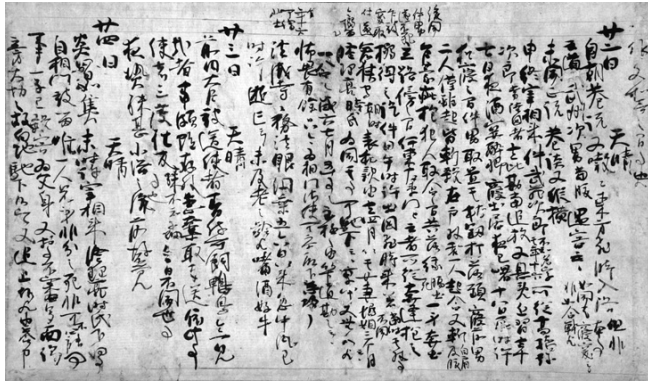
び

よすが

鎌倉時代の公家である藤原定家の日記『明月記』の断簡は、記録切と称され、古くから

茶掛けとして愛好されてきました。

本来、公家の日記とは、日々の公事の内容を子孫に伝え、将来の行動規範となることを念頭に置いた記録です。定家の『明月記』も、宮中の出来事を中心に、変わった記述では天文についての記事もあり（かに星雲の超新星爆発）、貴重な史料として扱われてきました。本作も、鎌倉政権でおこった政



治事件について詳細に記述してあります。

しかしながら『明月記』の面白さは、そういった史料としての側面だけでなく、定家の個性的な筆跡への崇敬からくる美術的な側面を合わせ持つという点です。定家様の流行に伴い、本作のように『明月記』は分断され、鑑賞性の高い芸術作品

『明月記』断簡

藤原定家

としての命を吹き込まれました。

いざ作品に対峙すると、過去のニュースが現在の速報ニュースのように緊迫感や躍動感を伴い新鮮によみがえってきます。その様な二つの側面が魅力となっています。

現在も蒐集家の間で広く愛好される作品の一つとなっています。（思文閣本社編集部・山本航）

思文閣出版 刊行図書全点展示販売 古書・和本展示販売

11月1日(日)～3日(火・祝)

■書店店頭に並ぶことの少ない小社刊行
図書をお手にとってご覧いただける
チャンス(割引あり)

■さらなる大幅割引コーナーも拡充

■古書についても、例年よりさらにお安
くいたします

■東山区の(株)思文閣本社でも、美術品
の展示を行います

(京都市東山区古門前通大和路東入元町355)

京阪三条駅徒歩5分、京都市バス知恩院前バス停5分

会場：思文閣会館

(京都市左京区田中関田町2-7)

- ・京都市バス百万遍バス停すぐ
- ・京阪出町柳駅徒歩15分

**同時開催
秋の古本まつり**

於：百万遍知恩寺

(思文閣会館から徒歩10分)

10月30日(金)～11月3日(火・祝)

思文閣美術館ご案内

没後30年

神谷美恵子がのこしたもの



イギリス ウォーリントン・パーク病院にて(1966年秋)

2009.
10/3(土)～
12/20(日)
10時～17時
休館日 月曜日
(祝日の場合開館
/翌火曜日休館)
入館料 一般 700(550)円
高年生 500(380)円
※()内は前売・
団体料金

精神科医として、ハンセン病患者の治療に尽力した神谷美恵子。没後30年を迎える今年、自筆原稿・日記・書簡・遺愛品・写真など約250点を展示し、神谷美恵子が今を生きる私達ののこしたものを検証します。

※会期中は記念イベントとして講演会や演奏会等を開催予定です。お問い合わせは、下記思文閣美術館まで。

京都市左京区田中関田町2-7

☎(075)751-1777 Fax.(075)762-6262

<http://www.shibunkaku.co.jp/artm/>

e-mail artm@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております(年4回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



東都勝景一覽

京都市東山区古門前通大和路東入元町357

☎(075)752-0005 Fax.(075)525-7155

<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>

e-mail kosho@shibunkaku.co.jp